瑜伽師地論と大乗荘厳経論

小谷信千代

本稿は、去る昭和五四年の日本西蔵学会において、「瑜伽師地論の大乗荘厳経論に対する先行性に関して」（『日本西蔵学会会報』第二六号に要旨発表）と題して研究発表したときの草稿を補訂し、論文としてまとめたものである。併せて、本稿の要旨である『日本西蔵学会会報』に掲載した拙稿も参見していただければ幸甚である。

まず、本稿の要旨を結論的に述べておく。瑜伽師地論菩薩地（以下 BBh と略記）と大乗荘厳経論（以下 MSA と略記）とは、既に S. Lévi、宇井伯寿、野沢静證、早島悟の先学の諸氏によって指摘されてきたように、[1]その章題および各章毎において取り扱かわれている項目に著しい共通性を有している。この共通性はこれら二論書の間に相当親密な関係が存在したことを示唆している。BBh が MSA に先行して影響を与えたのであろうか、それともその逆であろうか。近年の早島氏の研究によっても指摘されているように、[2]両者のうちの何れが先に成立したかを証明するに足る文献資料は未だ発見されていない。

両論の著者或は説者を弥勒に帰する漢訳伝承の立場からは、BBh の先行性がほぼ認められている。他方、MSA を弥勒に、BBh を無着に帰する西蔵伝承からすれば、MSA の先行性が主張される。例えば宇井博士は前者の立場から、両論の対応する個所を検討した結果、BBh の方がより組織的に分類され細目を立てて論述されているのに対して、MSA には BBh 中に見られない事柄が新たに詳細に説かれていること等からして、MSA の説明の仕方がいかにも BBh の所説を知った上でなされているように思われる、という印象を記している。[3]そ

れに反して Alex Wayman は後者の立場から、瑜伽師地論摂決択分（VS＜YBh, 但し YBh に含めて略記）中の「この場合、如来によって説かれた諸経典の意味を如実に説明することを荘厳経と言う」という一文を根拠として、MSA の YBh に対する先行性を主張した。[4] しかし、この文章中の「荘厳経」が或る特定の文体を指すものであって、特定の論書の名称である MSA を意味するものでないことは明らかである。Wayman 説はさほどの時を経ずに Lambert Schmithausen によって退けられた。[5]

筆者自身も YBh が MSA に先行すると考える点では Schmithausen と同意見である。ただ、問題となるのは、氏がその文献研究から伝承研究の一面を捨て去って、用語法（terminology）や教義及び思想の比較研究のみによってこれら初期瑜伽行学派の諸文献の歴史性を論じようとしていることである。初期瑜伽行学派の諸文献の年代を明らかにする確かな歴史的資料が未だ発見されていない現在、われわれは伝承を離れては文献の歴史性を語ることができない。伝承から身を引いて専ら用語法及び思想を比較研究することを事とする文献研究によって導き出された氏の成果は、伝承から敢て身を引くという氏の方法論の故に、宇井博士の研究成果の枠を出ることができなかった。宇井博士や Schmithausen の研究成果が伝承研究による結果によっても保証されるならば、われわれは YBh が MSA に先行するという両氏の見解をより確実なものとすることができるであろう。このような考えから、前掲の拙論では、YBh が MSA に先行するという事実を証明するに役立つと思える伝承資料を紹介したのである。

瑜伽師地論（YBh）の本地分中の一章である菩薩地と摂決択分との成立年代の前後に関説することはここでは差し控える。本稿では、MSA に対する Bhāṣya の著者である世親（Vasubandhu 400–480. A. D.）と、それを更に註釈する安慧（Sthiramati 510–570. A. D.）に従って、[6] 菩薩地と摂決択分とは、MSA が成立する頃には、一つの論書にまとめられて流布していたものと見做す。そして MSA との前後関係を考える場合には、摂決択分と菩薩地とを同時代のものとして差し支えないものと考える。

さて、BBh と MSA の章題及び各章で論じられる項目が非常によく一致していることは、既に屢々論じられた所であり、近くは早島氏の論文にまとめて紹介されて

いるので、本稿で重ねて説明することは差し控える。それに代えて、安慧がMSAを註釈するに際して、どのような態度でその仕事に臨もうとしたかを示す一文を提示しよう。彼の註釈は、先ず帰敬偈と謙譲の辞で始まる。続いてMASの構成 (śāstra-śarīra) が説明される。その説明は、北京版2aの三行目から、第一偈の註釈の始まる5bの一行目まで続く。このおよそ三葉半に及ぶ説明は、実に驚くべきことに、殆んど全文BBhからの引用で成り立っている。つまり安慧は、MSAの論の構成をBBhに依って説明しようとしているのである。[補註]

以下に帰敬偈から論の構成の説明に至る個所を八節に分けて提示する。先ず安慧の註釈のTib訳とその和訳を、次にそれに対応するBBhのSkt textを出す。その後に必要に応じて〔注記〕の項目を設ける。無性 (Ṅo bo ñid med pa) の註釈はそこにおいて必要な場合にのみ関説する。

使用テキストと略号

Sūtrālaṁkāra-vṛitti-bhāṣya (略号 SAVBh), Sthiramati 註、Pek. No. 5531

Bodhisattvabhūmi (略号 BBh), N. Dutt 校訂本、Patna, 1966 (西蔵訳、Pek. No. 5538, 漢訳、大正、巻30, No. 1579)

Mahāyāna-sūtrālaṁkāra-ṭikā (略号 MSAT), Asvabhāva 註、Pek. No. 5530

実線のアンダーラインはSAVBhとBBhとに共通する文章を示し、点線のそれはSAVBhとMSATとに共通する文章を示す。

第一節　帰敬偈並びに謙譲の辞

SAVBh, 1, b, 1—2, a, 3

Rgya gar skad du / Sūtrālaṁkāra-vṛitti-bhāṣyam /
bod skad du / Mdo sde rgyan gyi ḥgrel bçad,

Ḥphags pa ḥjam dpal la phyag ḥtshal lo //
dkon mchog gsum po rin chen gter gyur daṅ /
yaṅ dag Çāk thub sras kyi thu bo daṅ /
rgyal ba bdag ñid khyu mchog de de daṅ /
Chags med sras ⑦ kyi gcuṅ la mos pa daṅ /
bstan bcos gsal ba ḥgro la snaṅ byed daṅ /
bla ma gtso bo gaṅ las ḥdi thos pa /
rtag par kun la bdag gis sar gtugs te /
gus daṅ bcas pas spyi bos phyag ḥtshal nas /

don la bsam bya bdag blo blun pa daṅ /
bstan bcos ḥdi yi tshig don zab pa yan /
ḥgrel paḥi bsam pa bdag la ma byuṅ bas /
de phyir bdag la phan phyir cuṅ zad bya //

（試訳）

Skt 語では Sūtrālaṁkāra-vṛtti-bhāṣyaṁ.

Tib 語では Mdo sde rgyan gyi ḥgrel bçad.

聖文殊師利に帰命し奉る。

三宝の宝庫となれるものと、釈迦牟尼の最高の御子息と、多くの勝者子たちと、無着台下の御弟君とを御信頼申し上げます。また、明らかなる論を世間の人々に示し、それを私に学ばしめたる最高のラマの皆様方を、私は常に頭を地につけて恭しく敬首礼申し上げます。

［この論の］意味を審議するには私は智慧乏しく、しかもこの論の語義は甚だ深い。註釈を物しようなどという思いは私には起らない。従って、ただ自分の為めにいささかの試みをなすのみである。

［注記］

この個所は既に指摘されている如く、⑧殆んど全文異ることなく MSA に対する無性の註釈（MSAT）中に見出される。また以下に示すように、MSAT に於ける MSA の論の構成に関する説明は、北京版で一葉足らず、SAVBh に於けるその説明の三分の一にも満たないが、その殆んど全ての文章を SAVBh の上に認めることができる。のみならず、第一章の註釈の仕方を見る限り、安慧が阿毘達磨集論や摂大乗論を引用する個所では、無性も同様にそれらを引用し、聖無尽慧経、海慧経、宝雲経、妙手経等の経典に関しても、無性は安慧と同じ様に言及しているのである。近年になって、無性の学系が問題にされるようになった。⑨そこで少し脇道にそれることになるが、無性と安慧の関係について暫く考察することにしたい。

かつて Schmithausen は、転依の原語を āśrayaparāvṛttiḥ とする学系と āśraya-parivṛttiḥ とする学系とがあることを提議した。⑩その際に氏は、°parivṛttiḥ という語形のみを用いる阿毘達磨的な瑜伽行論書（例えば瑜伽師地論や阿毘達磨集論）が重要な役割を果している学系を無性・護法・戒賢の所属した系統とし、他方、殆んど専ら °parāvṛttiḥ という語形のみを用いる論書（例えば大乗荘厳経論や三十頌）に依る学系を安慧の所属する系統として区別された。袴谷憲昭氏は、かねてより、この

ような区別の可能性に対して疑いを示している。筆者にも、上記のように軌を一にする安慧と無性の註釈の仕方から考えて、両者を別の学系の人と見なすよりは、同じ伝統を共有する人と仮定する方が、より妥当であるように思える。袴谷氏によって既に指摘されているにも拘わらず、敢えて重説するのは、安慧と無性を同じ伝統に属するとする氏の仮説を、これから提示する「MSA の論の構成」を説明するに際して彼ら二人の取った説明法の類似性によって、より確実に裏づけ得るのではないかと思うからである。

第二節　論の構成の説明(1)
BBh 種姓品からの引用

SAVBh, 2, a, 3—3, b, 2

(1) theg pa chen po mdo sde rgyan gyi lus su bshag pa ni mdor na rigs la gnas paḥi byaṅ chub sems dpaḥ bla na med pa yaṅ dag par rdsogs paḥi byaṅ chub tu sems ⑪ bskyed nas byaṅ chub sems dpaḥi spyod pa la bslab par bya ba de ston to //

(2) de la rigs la gnas pa shes bya ba la / rigs ni bla na med paḥi byaṅ chub tu ḥtshaṅ rgya baḥi sa bon la bya ste / de la rigs shes kyaṅ bya / gshi shes kyaṅ bya / ñe bar rton ⑫ pa shes kyaṅ bya / rgyu shes kyaṅ bya / brtan ⑬ pa shes kyaṅ bya / gnas shes kyaṅ bya / sṅon du ḥgro ba shes kyaṅ bya ste / ḥdi dag ni rigs kyi miṅ gi rnam graṅs so // rigs de yaṅ mdor bsdus na rnam pa gñis te / raṅ bshin la gnas pa daṅ / yaṅ dag par bsgrub paḥo // de la raṅ bshin la gnas paḥi rigs ni byaṅ chub sems dpaḥ rnams kyi skye mched kyi khyad par ḥphral la rñed pa ni ma yin gyi / ḥkhor ba thog ma med pa nas gcig nas gcig tu brgyud de ḥoṅs pa / chos ñid kyis rñed pa ste / de daṅ ldan pas byaṅ chub sems dpaḥ rnams bla na med pa yaṅ dag par rdsogs paḥi byaṅ chub tu ḥtshaṅ rgya baḥi skal ba yod paḥo // yaṅ dag par bsgrubs paḥi rigs ni ma ṅes pa rigs can rnams dge baḥi bçes gñen bsten pa daṅ / sṅon dge baḥi rtsa ba la goms par byas pa las ṅes paḥi rigs su gyur pa ste / skabs ḥdir ni gñis ka la bya bar rigs so //

(3) de la raṅ bshin la gnas paḥi rigs ni ḥbras bu ma grub cin ma byuṅ baḥo // de la rigs kyi ḥbras

bu ni byaṅ chub tu sems bskyed pa daṅ / pha rol tu phyin pa drug la spyod pa ste / byaṅ chub tu sems ma bskyed / pha rol tu phyin par sbyor pa la ma shugs na rigs yod par mi rtogs pas na pra ba yin no // yaṅ dag par bsgrub paḥi rigs ni ḥbras bu daṅ bcas pa⑭ rags pa shes bya ste / raṅ bshin gyi rigs las bltos nas / de tsam du zab pa daṅ phra ba ma yin pas rags pa shes byaḥo //

(4) rigs de daṅ ldan paḥi byaṅ chub sems dpaḥ rnams ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas las kyaṅ ḥphags pa yin na / so so skye bo gshan la lta ci smos te / de bas na rigs de ni bla na med pa mchog khyad par can shes byaḥo // de ciḥi phyir she na / gñis po ḥdi dag ni mdor na rnam par dag par bya ste / ñon moṅs paḥi sgrib pa las rnam par dag par bya ba daṅ / çes byaḥi sgrib pa las rnam par dag par byaḥo // de la ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas kyi rigs can dag ni / ñon moṅs paḥi sgrib pa las rnam par dag pa tsam du zad de / çes byaḥi sgrib pa las rnam par dag pa ni ma yin no // byaṅ chub sems dpaḥi rigs can dag ni / ñon moṅs paḥi sgrib pa daṅ / çes byaḥi sgrib pa gñi ga las rnam par grol ba / de bas na mchog khyad par can bla na med par rigs par byaḥo //

(5) yaṅ rnam pa bshis byaṅ chub sems dpaḥ rnams ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas las⑮ khyad par du ḥphags par rig par bya ste // bshi po de gaṅ she na / dbaṅ po daṅ / rab tu sgrub pa daṅ / mkhas pa daṅ ḥbras buḥo // de la dbaṅ poḥi khyad par ni / byaṅ chub sems dpaḥ rnams ni raṅ bshin gyis dbaṅ po rnoḥo // raṅ saṅs rgyas rnams ni raṅ bshin gyis dbaṅ po ḥbriṅ ṅo // ñan thos rnams ni raṅ bshin gyis dbaṅ po tha maḥo // rab tu sgrub paḥi khyad par ni ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas dag bdag la phan pa daṅ bde ba byaḥi phyir shugs çiṅ sgrub paḥo // byaṅ chub sems dpaḥ dag ni bdag la phan pa daṅ / gshan la phan pa daṅ / ḥgro ba maṅ po la phan pa daṅ / ḥgro ba maṅ po la bde ba daṅ / ḥjig rten la sñiṅ rtse ba daṅ / lha daṅ miḥi skye bo maṅ poḥi don daṅ / bde ba daṅ / phan paḥi phyir rab tu shugs pa yin pas / de la mkhas paḥi khyad par ni ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas dag / phuṅ po daṅ khams

daṅ / skye mched daṅ / rten ciṅ ḥbrel bar ḥbyuṅ ba daṅ gnas daṅ / gnas ma yin pa daṅ / bden pa la mkhas par byed pa tsam du zad de / byaṅ chub sems dpaḥ rnams ni rigs paḥi gnas lṅa thams cad la mkhas par byed pas so // ḥbras buḥi khyad par ni / ñan thos rnams ñan thos kyi byaṅ chub khoṅ du chud pa daṅ / raṅ saṅs rgyas dag kyaṅ raṅ saṅs rgyas kyi byaṅ chub khoṅ du chud par zad de / byaṅ chub sems dpaḥ rnams kyis ni bla na med pa yaṅ dag par rdsoks paḥi byaṅ chub thob ciṅ khoṅ du chud pas na khyad shugs par rig par byaḥo // de la byaṅ chub kyi rigs de ni thog ma byaṅ chub tu sems bskyed pa daṅ / byaṅ chub kyi phyogs thams cad daṅ sa daṅ pha rol tu phyin pa rnams kyi gshi daṅ rten yin par rig par byaḥo //

（試訳）

(1) 大乗荘厳経〔論〕の構成は略説すれば、種姓に住する菩薩が無上正等覚に発心した後に菩薩行を学ぶべきことを説くことである。

(2) その中「種姓に住する」という場合、種姓（gotra）とは無上菩提において佛となる種子を指す。その〔種子〕を種姓とも呼び、よりどこ（ādhāra・持）とも、支持するもの（upastambha・助）とも、原因（hetu・因）とも、依止（niśraya・依）とも、因（upaniṣad・階級）とも、先導するもの（pūrvaṅgama・前導）とも呼ぶ。これらは、種姓の別名なのである。

またこの種姓はまとめると、本性住〔種性〕と習所成〔種姓〕の二種になる。その中、本性住種姓（prakṛtisthaṅ gotram）とは、菩薩たち〔各自それぞれの六〕処に個有なものであり、〔各自の六処とは〕別に得られるものではなく、無始以来、相続しているものであり、法爾として得られているものである。それを備えているが故に、菩薩は無上正等覚において佛となる資格（skal ba・bhāga）があるのである。習所成種姓（samudānītaṅ gotram）とは、不定種姓〔の菩薩〕が善知識に仕えたり過去世に善根を修めたことによって、定種姓となったものである。今の場合、二種共に該当するのである。

(3) その中、本性住種姓は、果が未だ完成せず生ぜざるものである。この場合、種姓の果とは発菩提心と六波羅蜜の修習である。菩提心を未だ生ぜず、〔六〕波羅蜜の修習にまだ入っていない場合には、種姓の有ることが知られないから、〔本性住種姓は〕微細である。習所成

種姓は、果を備えた麁なるものであると言われる。即ち、本性〔住〕の種姓に依存するので、その分、甚深でもなく微細でもなくなるから、麁であると言われるのである。

(4) このような種姓を備えた菩薩は、声聞や独覚よりも勝れている。ましてや、凡夫よりも勝れていることは言うまでもない。故に、この種姓は無上最勝であると言われる。というのは、次のような二種の浄化があるからである。即ち煩悩障の浄化と所知障の浄化とである。その中、声聞と独覚の種姓を持つ者は、煩悩障を浄化するだけで、所知障を浄化しない。それに対して菩薩の種姓を持つ者は、煩悩障と所知障の両方から離脱する。それ故、無上最勝であると考えられるのである。

(5) また四種の点で菩薩が声聞や独覚よりも勝れていることを知るべきである。四種とは何か、と言えば、根と行と善巧と果とである。その中、根が勝れているということは、菩薩は本来利根であり、独覚は本来中根であり、声聞は本来軟根であるということである。行が勝れているということは、声聞や独覚が自分自身の利益や安楽のために精進し努力するのに対して、菩薩は、自利と利他と、多くの衆生の利益と多くの衆生の安楽と、世間への慈悲と、多くの天と人との目的と利益と安楽とのために精進するからである。そして、善巧が勝れているというのは、声聞や独覚が、蘊界処や縁起や処非処及び〔四聖〕諦に於て善巧となるだけであるのに対して、菩薩は、五明処全てに善巧となるからである。果が勝れているということは、声聞は声聞の悟りを悟るだけであり、独覚は独覚の悟りを悟るだけであるのに対して、菩薩は無上正等覚を獲得し了解するが故に、勝れていると考えられるのである。そして、この菩提の種姓が、初発心と一切の菩提分と〔十〕地と〔六〕波羅蜜とのよりどころ(ādhāra)であり、依止(niśraya)であると考えられるのである。

BBh p. 2 (Pek. 3a 1—4a 1, Taisho. 478, c, 7—479, a, 10)

(2) tat punar etad gotram ādhāra ity ucyate. upastambho hetur niśraya upaniṣat pūrvaṅgamo nilaya ity apy ucyate. yathāgotram evaṁ prathamaś cittotpādaḥ sarvā ca bodhisattvacaryā. tatra gotraṁ katamat. samāsato gotraṁ dvividham. prakṛtisthaṁ samudānītañ ca. tatra prakṛtisthaṁ gotraṁ yad bodhisattvānāṁ ṣaḍāyatanaviśeṣaḥ. sa tādṛiśaḥ paraṁparāgato 'nādikālīko dharmatāpratilabdhaḥ.

tatra samudānītaṁ gotraṁ yat pūrvakśalamūlābhyāsāt pratilabdham. tad asminn arthe dvividham apy abhipretam. tat punar gotraṁ bījam ity ucyate. dhātuḥ prakṛitir ity api.

(3) tat punar asamudāgataphalaṁ sūkṣmaṁ vinā phalena. samudāgataphalam audārikaṁ saha phalena.

(4) tena khalu gotreṇa samanvāgatānāṁ bodhisattvānāṁ sarvaśrāvakapratyekabuddhān atikramya prāg evānyān sattvān niruttaro viśeṣo veditavyaḥ. tat kasya hetoḥ. dve ime samāsato viśuddhī. kleśāvaraṇaviśuddhir jñeyāvaraṇaviśuddhiś ca. tatra sarvaśrāvakapratyekabuddhānāṁ tadgotraṁ kleśāvaraṇaviśuddhyā viśudhyati na tu jñeyāvaraṇaviśuddhyā. bodhisattvagotraṁ punar api kleśāvaraṇaviśuddhyā api jñeyāvaraṇaviśuddhyā viśudhyati. tasmāt sarvaprativiśiṣṭaṁ niruttaram ity ucyate.

(5) api ca caturbhir ākārair bodhisattvasya śrāvakapratyekabuddhebhyo viśeṣo veditavyaḥ. katamaiś caturbhiḥ. indriyakṛitaḥ pratipattikṛitaḥ kauśalyakṛitaḥ phalakṛitaś ca. tatrāyam indriyakṛito viśeṣaḥ. prakṛityaiva bodhisattvas tīkṣṇendriyo bhavati. pratyekabuddho madhyendriyaḥ śrāvako mṛidvindriyaḥ. tatrāyaṁ pratipattikṛito viśeṣaḥ. śrāvakapratyekabuddhaś cātmahitāya pratipanno bhavati. bodhisattvaḥ apy ātmahitāyāpi parahitāya bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāyai arthāya hitāya sukhāya devamanuṣyāṇām. tatrāyaṁ kauśalyakṛito viśeṣaḥ. śrāvakaḥ pratyekabuddhaś ca skandhadhātvāyatanapratītyasamutpādasthānāsthānasatyakauśalyaṁ karoti bodhisattvas tatra cānyeṣu ca sarvavidyāsthāneṣu. tatrāyaṁ phalakṛito viśeṣaḥ. śrāvakaḥ śrāvakabodhiphalam adhigacchati. pratyekabuddhaḥ pratyekabodhim adhigacchati. bodhisattvo 'nuttaraṁ samyaksaṁbodhiphalam adhigacchati.

第三節　論の構成の説明(2)
BBh 発心品からの引用

SAVBh, 3, b, 2-4, a, 1

(1) ḥdi la byaṅ chub sems dpaḥ daṅ po ñid du so so skye boḥi dus na / byaṅ chub tu sems bskyed

pa ni ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas rnams kyi yaṅ dag paḥi smon lam thams cad kyi gtso bo yin la / de phan chad kyi byaṅ chub sems dpaḥi yaṅ dag paḥi smon lam thams cad kyaṅ der ḥdus çiṅ bsdus pas na / daṅ po de yaṅ dag paḥi smon lam gyi raṅ bshin no //

(2) yaṅ byaṅ chub sems dpaḥ byaṅ chub tu sems bskyed pa na / ḥdi ltar sems mṅon par ḥdu byed cin tshig tu yaṅ ḥbyin te / e maḥo bdag bla na med pa yaṅ dag par rdsogs paḥi byaṅ chub tu mṅon par rdsogs par saṅs rgyas par byas la / sems can ñan thos kyi rigs can daṅ / raṅ saṅs rgyas kyi rigs can dag ni mthar thug paḥi mya ṅan las ḥdas par gshag / theg pa chen poḥi rigs can dag ni / de bshin gçegs paḥi ye çes la bshag par byaḥo she sems bskyed par byed do // de bas na sems bskyed pa de ḥdod paḥi rnam paḥo //

(3) sems bskyed pa de yaṅ⑯ byaṅ chub daṅ sems can gyi don la dmigs nas / de gñis ḥdod paḥi phyir sems skyed par byed kyi / mi dmigs par ni ma yin te / de bas na sems bskyed pa de byaṅ chub la dmigs pa daṅ / sems can gyi don la dmigs paḥo //

(4) gshan yaṅ brgya byin daṅ tshaṅs pa la sogs pa ḥjig rten paḥi dge baḥi rtsa ba bskyed paḥi phyir smon lam btab pa daṅ / ñan thos daṅ raṅ saṅs rgyas la sogs pa ḥjig rten las ḥdas paḥi dge baḥi rtsa ba bskyed paḥi phyir / yaṅ dag paḥi smon lam btab pa de dag thams cad kyi naṅ na daṅ po byaṅ chub tu sems bsyked pa ḥdi yaṅ dag paḥi smon lam gyi mchog yin pas bla na med pa ste

(5) de ltar na sems bskyed pa ḥdi yi raṅ bshin daṅ / rnam pa daṅ dmigs pa daṅ / mchog tu gyur pa ste rnam pa bshir rig par byaḥo//

(試訳)

(1) ところで、菩薩が最初に凡夫の位において菩提心を生ずることは、声聞や独覚たちの全ての正願の根本であり、彼より上位の菩薩の正願も全てその中に包摂せられているから、この最初の〔発菩提心〕は正願を自性とする。

(2) また菩薩は菩提心を生ずる時、次のような思いを起し、次のような言葉を語る。「ああ私は、無上正等覚を覚り、声聞種姓や独覚種姓の衆生を究極の涅槃にもた

らし、大乗種姓の〔衆生〕を如来の智の上に安住させねばならない、と発心いたします」と。それ故、この発心は願いを行相とする。

(3) その発心は、覚りと衆生の利益とを所縁とし、この二を願うが故の発心であり、〔これらを〕所縁とせずに〔なされたもの〕ではない。それ故、この発心は、菩提を所縁とし衆生の利益を所縁とする。

(4) さらにまた、帝釈天や大梵天などは世間的な善根を生ぜんがために願をなし、声聞や独覚などは出世間的な善根を生ぜんがために〔願をなす〕。それらの正願の中で、この最初の発心が最勝の正願であるから、無上なのである。

(5) 以上のように、この発心は、自性と行相と所縁と最勝という四点に関して理解さるべきである。

BBh p. 8 (Pek. 8, b, 4—9, a, 6, Taisho. 480, b, 25-480, c, 13)

(1) iha bodhisattvasya prathamaś cittotpādaḥ sarvabodhisattvasamyakpraṇidhānānām ādyaṁ samyakpraṇidhānaṁ tadanyasamyakpraṇidhānasaṁgrāhakam. tasmāt sa āditaḥ samyakpraṇidhānasvabhāvaḥ.

(2) sa khalu bodhisattvo bodhāya cittaṁ praṇidadhad evaṁ cittam abhisaṁskaroti vācañ ca bhāṣate. aho bata aham anuttarāṁ samyaksaṁbodhim abhisaṁbudhyeyaṁ sarvasattvānāñ cārthakaraḥ syām atyantaniṣṭhe nirvāṇe pratiṣṭhāpayeyaṁ tathāgatajñāne ca. sa evam ātmanaś ca bodhiṁ sattvārthañ ca prārthayamānaś cittam utpādayati. tasmāt sa cittotpādaḥ prārthanākāraḥ.

(3) tāṁ khalu bodhiṁ sattvārthañ cālambya sa cittotpādaḥ prārthayate nānālambya. tasmāt sa cittotpādo bodhyālambanaḥ sattvārthālambanaś ca.

(*) sa ca cittotpādaḥ sarvabodhipakṣyakuśalamūlasaṁgrahāya pūrvaṅgamatvāt kuśalaḥ paramakauśalyaguṇayuktaḥ bhadraḥ paramabhadraḥ kalyāṇaḥ paramakalyāṇaḥ sarvasattvādhiṣṭhānakāyavāṅmanoduścaritavairodhikaḥ.

(4) yāni ca kānicit tadanyāni laukikalokottareṣv artheṣu kuśalāni samyakpraṇidhānāni teṣāṁ sarveṣām agryam etat samyakpraṇidhānaṁ niruttaraṁ yaduta bodhisattvasya prathamaś cittotpādaḥ.

(5) evam ayaṁ prathamaś cittotpādaḥ svabhāvato

'pi veditavyaḥ. ākārato apy ālambanato 'pi guṇato 'py utkarṣato 'pi pañcalakṣaṇo veditavyaḥ.

〔注記〕

この個所では、発心の在り方（体）が説明される。SAVBh では、自性と行相と所縁と最勝という四点から発心を説明する。BBh では、その上に功德を加えた五点からそれを説明する。上掲の引用文中、(3)と(4)の間にある(*)印の文章がそれに当る。(4)の文章には下線を施さなかったが、内容的には同一であると考えられる。

第四節　論の構成の説明(3)
BBh 発心品からの引用

SAVBh, 4, a, 1—4, a, 5

(1) yaṅ sems bskyed pa de rnam pa gñis su rig par bya ste / ḥbyuṅ ba daṅ ḥbyuṅ ba ma yin paḥo // de la ḥbyuṅ ba ni daṅ po sems bskyed nas çin tu de dag gi rjes su ḥjug gi ldog par mi byed do // ḥbyuṅ ba ma yin pa ni çin tu de dag gi rjes su ḥjug pa ma yin gyi slar yaṅ ldod par byed paḥo //

(2) sems bskyed nas ldog pa de yaṅ rnam pa gñis te / çin tu ldog pa daṅ / çin tu ldog pa ma yin paḥo // de la çin tu ldog pa ni gaṅ lan cig phyir ḥoṅ nas byaṅ chub tu sems mi skye ba ste / dper na ñan thos kyi rigs can dag theg pa chen por byaṅ chub tu sems bskyed pa las ñan thos kyi rigs yod pas lan cig byan chub kyi sems bor na phyis byaṅ chub kyi sems mi skyeḥo // çin tu ldog pa ma yin pa ni lan cig phyir log nas yaṅ byaṅ chub kyi sems skye ba ste byan chub kyi sems rgya cher rab tu dbye ba daṅ /

（試訳）

(1) またその発菩提心は二種であると考えられる。即ち涅槃に導くもの（nairyāṇika・永出）と涅槃に導かないもの（anairyāṇika・不永出）とである。その中、涅槃に導く〔発菩提心〕とは、初発心の後、決定してその〔初発心〕に随順し、決して再び退転しない所のものである。他方、涅槃に導かない〔発菩提心〕とは、決定してその〔初発心〕に随順することがなく、再び退転する所のものである。

(2) その発心以後の退転にも二通りある。完全に退転してしまうもの（ātyantikī・究竟）と、完全には退転しないもの（anātyantikī・不究竟）とである。その中、完

全に退転してしまうものとは、一度退転すれば、もはや菩提心を生じないものである。例えば、声聞種姓のものは、大乗に菩提心を生じようとしても、声聞の種姓があるが故に、一度〔大乗の菩提心から退転して、声聞の〕菩提心ある者となった後には、〔大乗の〕菩提心を生じない。完全には退転しないものとは、一度退転しても、また菩提心を生じ、菩提心を増大するものである。

BBh p. 9 (Pek. 9, b, 4—9, b, 7, Taisho. 480, c, 26—481, a, 3)

(1) sa ca bodhisattvasya prathamacittotpādaḥ samāsena dvividhaḥ. nairyāṇikaś cānairyāṇikaś ca. tatra nairyāṇiko ya utpanno 'tyantam anuvartate na punar vyāvartate. anairyāṇikaḥ punar ya utpanno nātyantam anuvartate punar eva vyāvartate.

(2) tasya ca cittotpādasya vyāvṛittir api dvividhā. ātyantikī cānātyantikī ca. tatrātyantikī yat sakṛidvyāvṛittaṁ cittaṁ na punar utpadyate bodhāya. anātyantikī punaḥ yad vyāvṛittaṁ cittaṁ punaḥ punar utpadyate bodhāya.

第五節　論の構成の説明(4)

BBh 発心品からの引用を示唆する

SAVBh, 4, a, 5

skye baḥi rgyu daṅ / rkyen daṅ ldog paḥi rgyu daṅ / rkyen la sogs pa shib tu ni Rnal ḥbyor spyod paḥi sa las ḥbyuṅ ste / ḥdir yaṅ de bshin du blta bar byaḥo //

(試訳)

また〔菩薩の最初の発心の〕生ずる因と縁と、退転する因と縁などは詳細に瑜伽師地論の中に説かれている。本論に於ても同様に考えるべきである。

〔注記〕

ここに言われている瑜伽師地論の個所は、BBh. p. 9, 11—p. 14, 5 (Pek. 9, b, 7—14, b, 1, Taisho. 481, a, 3—482, b, 29) に相当すると思われる。それは次のような書き出しで始まっている。

tasya khalu cittasyotpādaḥ caturbhiḥ pratyayaiś caturbhir hetubhiś caturbhir balair veditavyaḥ. catvāraḥ pratyayāḥ katame.....

彼の発心は四種の縁と四種の因と四種の力によること
を知るべきである。四種の縁とは何か……

退転の原因に関しても

catvāri bodhisattvasya cittavyāvṛittikāraṇāni. katamāni catvāri……

菩薩には四種の〔菩提〕心の退転する原因がある。四種とは何か……

というように説明されている。その他、不退転の菩薩に備わる功徳などが説かれている。

第六節　論の構成の説明(5)

BBh 自他利品からの引用

SAVBh, 4, a, 5—4, b, 1

da ni byaṅ chub sems dpaḥi spyod pa bstan par byaḥo // de ltar byaṅ chub tu sems bskyed paḥi byaṅ chub sems dpaḥ rnams kyi byaṅ chub sems dpaḥi spyod pa gaṅ she na / de yaṅ mdor na rnam pa gsum du rig par bya ste / gaṅ la bslab pa daṅ / ji ltar bslab pa daṅ / gaṅ dag slob pa ste / de rnams gcig tu bsdus nas byaṅ chub sems dpaḥi sbyod pa shes byaḥo // de la gaṅ la byaṅ chub sems dpaḥ bslab par bya she na / gnas bdun la bslab par byaḥo / gnas bdun po gaṅ she na / bdag gi don daṅ / gshan gyi don daṅ / de kho naḥi don daṅ / mthu daṅ / sems can yoṅs su smin pa daṅ / bdag ñid saṅs rgyas kyi chos yoṅs su smin pa daṅ / bla na med pa yaṅ dag par rdsogs paḥi byan chub pa ste gnas bdun no //

bsdus paḥi mdo ni /

bdag daṅ gshan gyi don de ñi / mthu daṅ sems can smin pa daṅ / bdag ñid saṅs rgyas chos rnams daṅ / bdun pa mchog gi byaṅ chub po //

(試訳)

次に菩薩行を説明しなければならない。以上のように菩提心を生じた菩薩における菩薩行とは何か、と言えば、それは要約すれば三種であると考えられる。即ち、学ぶ対象（yatra śikṣante・所学処）と学び方（yathā śikṣante・如是学）と学ぶ人（ye śikṣante・能修学）とである。これらを一つにまとめて菩薩行と呼ぶ。この中、菩薩は何を学ぶのかと言えば、七のことがら（七処）を学ぶ。七処とは何かと言えば、自己の利益、他人の利益、真実の対象、威力、衆生を成熟させること、自己の佛法

を成熟させること、及び無上正等覚という七のことからである。

摂頌 (uddānam) にいわく。

自他の利益と真実の対象と、威力と衆生の成熟と、自己の佛法〔の成熟〕と及び第七に無上菩提とである。

BBh p. 15 (Pek. 14, b, 1—14, b, 5, Taisho. 482, c, 9)

evam utpāditacittānāṁ bodhisattvānāṁ bodhisattvacaryā katamā. samāsato bodhisattvā yatra śikṣante yathā ca śikṣante ye[17] ca śikṣante tat sarvam aikadhyam abhisaṁkṣipya bodhisattvacaryety ucyate. kutra punar bodhisattvāḥ śikṣante. saptasu sthāneṣu śikṣante. saptasthānāni katamāni. svārthaḥ parārthaḥ tattvārthaḥ prabhāvaḥ sattvaparipākaḥ ātmano buddhadharmaparipākaḥ anuttarā ca samyaksaṁbodhiḥ saptamaṁ sthānam.

uddānam.

sva-parārthaś ca tattvārthaḥ prabhāvaḥ paripācane /

sattva-svabuddhāṇāṁ parā bodhiś ca saptamī //

〔注記〕

点線のアンダーラインは先に註記したように、安慧釈 (SAVBh) と無性釈 (MSAT) とに共通する文章を示している。

大乗荘厳経論 (MSA) 第九章菩提品の最後にも、ここに掲げられた所学処を要約的に示す摂頌とほぼ同じ内容の次のような摂頌が置かれている。

uddānaṁ

ādiḥ siddhiḥ śaraṇaṁ gotraṁ citte tathaiva cotpādaḥ /

svaparārthas tatvārtha prabhāvaparipākabodhiś ca // (Lévi 本, p. 50)

総摂すると、最初と成宗と帰依と種姓と、そしてまた発心と、自他の利益と真実の対象と、および威力と成熟と菩提とである。

「最初」とは、安慧に従えば[18]、MSA を何故「荘厳経 (sūtrālaṁkāra)」と名づけるかを説明する第一章第二偈乃至第六偈 (Lévi 本) の五偈に相当する。「成宗」とは、それに続く大乗を証明する一五偈に相当する。乃至、「菩提」とは、菩提品の八七偈に相当する。最初と成宗

と帰依の三項目は、これまで見てきた BBh の中には現われなかった。この三項目は、MSA が独立の著作としての体裁を整えるために設けられたものである。他方、YBh の一部である BBh にはそれを設ける必要がなかった。それ以外の項目は、BBh と一致する。このように、MSA の著者自らの偈からしても、MSA と BBh の対応は確認される。世親も BBh との対応を認めて、次のようにこの摂頌を註釈している。[19]

eṣa ca bodhyadhikāra ādim ārabhya yāvat bodhipaṭalānusāreṇānugantavyaḥ.

この菩提品は、最初から〔BBh の〕菩提品に至るまでに順じて、理解すべきである。

MSA と BBh とには、章題（品名）の表記法に違いがある。MSA では品名は—adhikāra と表記し、BBh では—paṭala と表記する。従って、世親釈中の先の bodhyadhikāra は MSA の菩提品を、後の bodhipaṭala は BBh のそれを指す。この世親の註釈を安慧は更にはっきりと次のように「瑜伽師地論菩薩地」の書名を挙げて註釈している。[20]

〔世親のその註釈の意味は、〕初品から菩提品に至るまでにおいて説かれたこれらのものごとには、瑜伽師地論の菩薩地に説かれた[21]次第順序がそのまま、この〔荘厳経論〕においても当てはめらるべきである、ということなのである。

第七節　論の構成の説明(6)
BBh 力種姓品からの引用

SAVBh, 4, b, 1—4, b, 5

gaṅ du byaṅ chub sems dpaḥ bslab par bya ba de bstan jin to // ji ltar bslab par bya ba de bstan par bya ste / ji ltar bslab par bya she na / ḫdi la daṅ po ñid du byaṅ chub sems dpaḥ byaṅ chub sems paḥi bslab pa la slob par ḥdod pas theg pa chen poḥi chos la mos pa maṅ bar bya ba daṅ / chos btsal bar bya ba daṅ / chos bçad par bya ba daṅ / chos kyi rjes su mthun paḥi chos bsgrub par bya ba daṅ / yaṅ dag paḥi bstan pa daṅ / gdams ṅag bstan par bya ba daṅ / yaṅ dag paḥi bstan pa daṅ / gdams ṅag la gnas par bya ba daṅ / thabs kyis yoṅs su zin paḥi lus daṅ ṅag gi las daṅ yid kyi las daṅ ldan par byaḥo //

bsdus paḥi mdo ni

mos par bya ba maṅ ba daṅ / chos btsal ba daṅ bçad pa daṅ / de bshin du ni bsgrub pa daṅ / yaṅ dag bstan daṅ gdams ṅag daṅ / thabs kyis yoṅs su zin pa yi / lus ṅag yid las tha maḥo //

(試訳)

菩薩が何を学ぶかを説き終った。それではどのようにして学ぶのか、それを説かねばならない。どのようにして学ぶのかと言えば、まず第一に、菩薩の学法を学びたいと思う菩薩は、大乘の法に対して、多くの信解をなし、求法し、説法し、法に随って法を行じ（法随法行）、正しく教え導き（教授・教誡）、正しい教えと導きを持続し、方便によって包まれた身語意の行為を備えなければならない。

摂頌に曰く。

信解の多いことと求法及び説法と、かつまた修行と正しい教え導きと、そして最後に方便を伴なう身語意の行為とである。

BBh p. 67 (Pek. 60, b, 1—60, b, 4, Taisho. 500, b, 10—500, b, 17)

nirdiṣṭam tāvad yatra bodhisattvena śikṣitavyam. yathā punaḥ śikṣitavyaṁ tad vakṣyāmi.

uddānam.

adhimukter bahulatā dharmaparyeṣṭideśanā /
pratipattis tathā samyagavavādānuśāsanam /
upāyasahitaṁ kāyavāṅmanaḥkarma paścimam //

ihādita eva bodhisattvena bodhisattvaśikṣāsu śikṣitukāmena adhimuktibahulena bhavitavyaṁ dharmaparyeṣakeṇa dharmadeśakena dharmānudharmapratipannena samyagavavādānuśāsakena samyagavavādānuśāsanyāṅ ca sthitena upāyaparigṛihitakāyavāṅmanaḥkarmaṇā ca bhavitavyam.

〔注記〕

BBh では摂頌が先に出され説明は後に置かれている。この摂頌とほぼ同じ内容の摂頌が、MSA 第十四章教授教誡品の最後にも置かれている。

uddānaṁ.

adhimukter bahulatā dharmaparyeṣṭideśane /
pratipattis tathā samyagavavādānuśāsanaṁ // Lévi 本 p. 97)

第八節　論の構成の説明(6)
BBh 菩薩功徳品からの引用

SAVBh, 4, b, 5—5, b, 1

(1) ji ltar bslab par bya ba yaṅ bstan zin to // da ni gaṅ dag bslab par bya ba de bstan par byaḥo / de la gaṅ slob par byed ce na / byaṅ chub sems dpaḥ rnams slob par byed ceḥo // byaṅ chub sems dpaḥ de yaṅ mdor bsdu na / rnam pa bcur rig par bya ste / rigs la gnas pa daṅ / rab tu shugs pa daṅ / bsam pa ma dag pa daṅ / bsam pa dag pa daṅ / bsam pa yoṅs su ma smin pa daṅ / bsam pa yoṅs su smin pa daṅ / ṅes pa ma yin par rtogs pa daṅ / ṅes par rtogs pa daṅ / skye ba gcig gis thogs pa daṅ / srid pa tham paḥo //

(2) byaṅ chub sems dpaḥ de dag la spyir mi dbye bar miṅ du ḥdi skad ces bya ste / byaṅ chub sems dpaḥ sems dpaḥ che / blo ldan gzi brjid che ba daṅ / thugs rje chen po bsod nams che / dbaṅ phyug ded dpon chen po daṅ / rgyal baḥi gnas daṅ chos chen po / shes bya ba la sogs paḥo //

(3) de la rigs la gnas pa ni bla na med paḥi byaṅ chub kyi sa bon tsam yod la byaṅ chub tu sems ma bskyed paḥo // gaṅ rigs la brten nas byaṅ chub sems dpaḥi bslab pa la bslas par byaḥi phyir byaṅ chub tu sems bskyed nas byaṅ chub sems dpaḥi tshul khrims la gnas pa ni rab tu shugs pa shes byaḥo // rab tu shugs pa de ji srid du sa daṅ po rab tu dgaḥ baḥi sar ma shugs te / mos par spyod paḥi sa la gnas pa de srid du bsam pa ma dag pa shes byaḥo // nam sa daṅ por shugs pa nas sa bdun pa ㉒ man chad kyi dus na ni bsam pa dag pa shes byaḥo // bsam pa dag pa de ñid ji srid du mthar thug paḥi sa brgyad pa daṅ / dgu pa la ma shugs kyi bar du bsam pa yoṅs su ma smin pa shes bya ste / brtsal ba daṅ ḥbad pa yod paḥi phyir ro // nam sa brgyad pa daṅ dgu pa la shugs paḥi dus na bsam pa yoṅs su smin pa shes bya ste rtsol ba daṅ ḥbad pa med paḥi phir ro // yoṅs su smin pa de yaṅ ji srid du rgyal tshab du ṅes paḥi sa ㉓ bcur ma shugs kyi bar du ṅes pa ma yin par gtogs pa shes byaḥo // sa bcur shugs nas na ṅes par gtogs pa shes byaḥo //

sa bcu paḥi byaṅ chub sems dpaḥ ṅes par gtogs pa* de la yaṅ rnam pa gñis te / skye ba gcig gis thogs pa daṅ / srid pa tha maḥo // skye ba gcig gis thogs pa ni tshe ḥdi ñid la bla na med par ḥtshaṅ mi rgyaḥi / skye ba de ḥdas nas tshe rabs gshan dag tu bla na med paḥi byaṅ chub tu ḥtshaṅ rgya ba ste dper na ḥphags pa byams pa lta buḥo // srid pa tha ma pa ni tshe de ñid la bla na med paḥi byaṅ chub tu ḥtshaṅ rgya ba ste / dper na byaṅ chub sems dpaḥ don thams cad grub pa lta buḥo //

(4) ḥdi gsum ni bstan bcos ḥdiḥi lugs te / bstan bcos ḥdi ḥgo gshug tu don gsum bçad par zad de / gsum gaṅ she na / byaṅ chub sems dpaḥi rigs daṅ byaṅ chub tu sems bskyed pa daṅ / byaṅ chub sems dpaḥi spyod pa la bslab par byaḥo / /

(試訳)

(1) どのように学ぶかをも説き終った。次に誰れが学ぶかを説明しなければならない。それでは誰れが学ぶのかと言えば、菩薩が学ぶのであると言う。その菩薩は略説すれば十種あると考えられる。即ち、菩薩の種姓に止まっている者 (gotrastha・住種姓) と、菩薩戒に着手した者 (avatīrṇa・已趣入) と、求道心を未だ浄化していない者 (aśuddhāśaya・未浄意楽) と、已に浄化した者 (śuddhāśaya・已浄意楽) と、未だ成熟していない者 (aparipakva・未成熟意楽) と、已に成熟している者 (paripakva・已成熟意楽) と、未だ〔法王子となることに〕決定していない者 (aniyatipatita・未堕決定) と、決定している者 (niyatipatita・已堕決定) と、一生補処 (ekajātipratibaddha) と、最後の生存に住する者 (caramabhavika・住最後有) とである。

(2) これらの菩薩の全てに違いがあるわけではないが、名前の上では、菩薩とか摩訶薩とか智慧ある者とか最上の照明とか憐愍者とか大福徳者とか自在者とか商主とか勝者のたのみとする者とか法師などと呼ばれる。

(3) この中、住種姓の者とは、無上菩提の種子のみあって、まだ発心していない者である。その種子に依って、菩薩の学法を学ぼうとして菩提心を生じ、菩薩戒に住する者を已趣入〔の菩薩〕と言う。その已趣入の者が、初歓喜地に未だ悟入せず、信解行地に住している限り、未浄意楽と呼ばれる。初地に悟入してから、第七地に至るまでの位を已浄意楽と言う。その已浄意楽の者が第八・第九の到究竟地に至るまでを未成熟意楽と呼ぶ。まだ

〔為すべき〕努力や精進が残っているからである。第八・第九の地に悟入すれば已成熟意楽と呼ばれる。もはや〔それ以上為すべき〕努力や精進が残っていないからである。その已成熟の者が、〔法〕王子〔となること〕に決定する第十地にまだ悟入していない場合、未堕決定と言う。第十地に悟入すれば、堕決定と言う。その第十地の堕決定の菩薩にも二種類ある。一生所繋と住最後有とである。一生所繋とは、その生涯では無上〔菩提〕を覚らず、その生涯を経た後の来生において無上菩提を覚る者である。例えば聖者弥勒の如くに。住最後有とは、その生涯で無上菩提を覚る者である。例えば、全ての目的を成就した (sarvārthasiddhi・一切義成) 菩薩の如くに。

(4) 以上の三がこの〔大乗荘厳経〕論の主題である。この論は終始三のことを説くことに尽きる。三とは何かと言えば、菩薩の種姓と発菩提心と菩薩行の修学とである。

BBh p. 202—203 (Pek. 178, a, 5—178, b, 7, Taisho. 549, a, 7—549, b, 1)

(1) ke punas te bodhisattvā ya evaṁ śikṣamāṇā anuttarāṁ samyaksambodhim abhisaṁbudhyante. te samāsato daśa veditavyāḥ. gotrasthaḥ, avatīrṇaḥ, aśuddhāśayaḥ, śuddhāśayaḥ, aparipakvaḥ, paripakvaḥ, aniyatipatitaḥ, niyatipatitaḥ, ekajātipratibaddhaḥ, caramabhavikaś ceti.

(2) teṣāṁ punaḥ sarveṣāṁ eva bodhisattvānām abhedena[24] imāny evaṁ bhāgīyāni gauṇāni nāmāni veditavyāni. tadyathā bodhisattvo mahāsattvaḥ dhīmān uttamadyutiḥ jinaputro jinādhāraḥ vijetā jināṅkuraḥ vikrāntaḥ paramārthaḥ sārthavāho mahāyaśaḥ kṛipālur mahāpuṇyaḥ īśvaro dhārmikaś ceti.

(3) tatra gotrastho bodhisattvaḥ śikṣamāṇaś cittam utpādayati. so 'vatīrṇa ity ucyate. sa eva punar avatīrṇo yāvat śuddhāśayabhūmim apraviṣṭo bhavati tāvad aśuddhāśaya ity ucyate. praviṣṭas tu śuddhāśayo bhavati. sa eva punaḥ śuddhāśayo yāvan niṣṭhāgamanabhūmim apraviṣṭo bhavati tāvad aparipakva ity ucyate. praviṣṭas tu paripakvo bhavati. sa punar aparipakvo yāvan niyatāniyatacaryābhūmau vā nānupraviṣṭo bhavati tāvad aniyata ity ucyate. praviṣṭas tu niyato bhavati. sa eva punaḥ paripakvo* dvividhaḥ. ekajātipratibaddho ya-

sya janmano 'nantaraṃ anuttarāṃ samyaksambodhim abhisambhotsyate. caramabhavikaś ca tasminn eva janmani sthito anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisaṃbudhyate.

〔注記〕

BBh では(1)の直後に(3)が続く。今は、SAVBh の説明の順序に従って並べ変えた。※印の個所は BBh では paripakvo（已成熟）であるが、SAVBh は niyata（堕決定）とする。その他、SAVBh では、十種の菩薩を十地と関係づけて説明している点が、BBh とは異なる。(2)の菩薩の名称の数は、BBh では一六、SAVBh では一〇であり、五が除かれている。また挙げられている名称の中でも、jinādhāra（最勝任持）と sārthavāha（商主）の順序が BBh とは異なっている。けれども、MSA 第十九章功徳品——まさしく安慧がこの節に引用している BBh の菩薩功徳品に対応する——には、BBh の枚挙の仕方と全く同じ次のような偈頌が見出される。

bodhisatvo mahāsatvo dhimaṃś caivottamadyutiḥ / jinaputro jinādhāro vijetātha jināṅkuraḥ // 73 // vikrāntaḥ paramaś cāryaḥ sārthavāho mahāyaśāḥ / kṛipāluś ca mahāpuṇya iśvaro dhārmikas tathā // 74 // (Lévi 本 p. 174)

以上のような諸点、すなわち、

① MSA の論の構成を説明する安慧の註釈

② 第六節の〔注記〕に記したような世親の Bhāṣya の語

③ BBh 第十八章菩薩功徳品の一文と MSA 第十九章功徳品第七三、七四偈との一致、或は、両論に現われる摂偈の類似性

などから、BBh と MSA との間に密接な関係が存在した事はもはや疑いえない。しかし、この限りでは、両論のいずれが先行して他方に影響を与えたかは決定できない。この小論では、冒頭にも述べたように、従来 BBh と MSA の関係が両論の上に現われる用語法（terminology）や教義及び思想の比較研究からのみ論じられてきたことによる欠陥を考慮して、伝承研究によってその不足を補足しようと試みたのである。そういう意図のもとに、安慧が MSA の註釈を始めるに際して、MSA という論がどういうように構成されているかを説明するため

の導入部「論の構成の解説」を、殆んど全文 BBh からの引用に依って行っていることを、より明確な形で示したいために、煩を恐れずあえて両論を対照的に掲げたのである。小論の目的はこれで一応達せられた。BBh (YBh) と MSA のいずれが先に現われて、もう一方に影響を与えたかという問題を解決するには、現在のところ筆者は準備不足である。この点に関して先に『日本西蔵学会会報』に紹介した以外の新しい資料を未だ発見していない。最後に拙稿のその個所を引用して結びとしたい。

MSA 第二章帰依品冒頭における安慧の註釈は、YBh の MSA に対する先行性を示す一資糧となるであろう。安慧は、世親の「勝れた帰依をまとめる一偈 (śaraṇaga-manaviśeṣasaṅgrahaślokaḥ)」[25] という Bhāṣya の語を註釈して次のように言っている。

帰依は瑜伽師地論に詳細に説かれているから、ここでは非常に重要な少しだけの意味にまとめて説くが故に、「まとめる」と言ったのである。[26]

つまり世親が「帰依をまとめる一偈」という注を施したのは、既に YBh に詳細に説かれている帰依の説明を、[MSA の著者である弥勒、或は無着が] ごく重要な少しの意味にまとめて MSA 第二章帰依品の第一偈としたことを意味するというのである。ところで、帰依の詳しい説明は BBh には見られず、摂決択分中に見られる。従ってこの場合の「瑜伽師地論」は摂決択分を指している、と考えられる。

以上のように、世親—安慧の伝承においては、YBh が MSA に先行して影響を与えたと考えられていたことが一応結論づけられるのである。（一九八〇・三・八）

注

① S. Lévi, *Mahāyāna-sūtrālaṁkāra, tome II* (Paris, 1911), Introduction.
野沢静證「智吉祥造『荘厳経論総義』に就て」(『佛教研究』第二巻第二号) 一九二一
同著「利他賢造『荘厳経論初二偈解説』に就て」(『宗教研究』新一三) 一九三六
宇井伯寿『瑜伽論研究』一九五八
早島　理「菩薩道の哲学」(『南都佛教』第三〇号) 一九七三。

② 早島、前掲論文 p. 2, n. 6.

③ 宇井、前掲書 pp. 55, 70, 77, 80 etc.

④ A. Wayman, *Analysis of the Śrāvakabhūmi Manuscript* (Berkely, 1961) pp. 30-31.

⑤ L. Schmithausen, "Zur Literaturgeschichte der älteren Yogācāra-schule", (ZDMG, Supplementa I, 1969) pp. 819-820, n. 45.

⑥ 例えば、本論末尾に言及するMSA第11章帰依品冒頭句に対する世親と安慧の註釈を参照。

⑦ sras は子息の意味であり、拙訳のように敬語と解してよいか否かは不明。

⑧ 山口 益『中辺分別論釈疏』序論 p. 31.

⑨ 片野道雄『インド佛教における唯識思想の研究』p. 32

袴谷憲昭 "Asvabhāva's Commentary on the Mahāyānasūtrālaṁkāra IX, 56–76" (JIBS, XX–1, 1971) pp. 470, 471.

同著「〈三種転依〉考」(『佛教学』第11号) 1976, p. 50

同著 "Asvabhāva's and Sthiramatiś Commentaris on the MSA, XIV, 34–35" (JIBS, XXVII–1, 1978) p. 488.

同著「Viniścayasaṃgrahaṇī における アーラヤ識の規定」(『東洋文化研究所紀要』第七九冊)、p. 22.

⑩ L. Schmithausen, *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścaya-Saṁgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ* (Wien. 1969) p. 102.

⑪ sems はデルゲ版 (以下 Der. と略記) によって補う。

⑫ Pek. ston→Der. rton.

⑬ Pek. bstan→Pek. brtan.

⑭ pa は Der. によって補う。

⑮ Pek. la→Der. las.

⑯ Pek. ḥaṅ→Der. yaṅ

⑰ Dutt 本 yac ca→Wogihara 本 ye ca

⑱ Pek. 164, a. 2

⑲ Lévi 本 p. 50 (Pek. 173. b. 8)

⑳ Pek. 164, a. 8.

㉑ BBh, Wogihara 本 p. 411–414. (大正、巻 30, 575, b. 29–576, b. 27)

㉒ Der. によって pa を補う。

㉓ Pek. も Der. も sas.

㉔ Dutt 本では、abhedenimāny, Wogihara 本に従う。

㉕ Lévi 本 p. 8.

㉖ Pek. 33. a. 8.

(補註) 脱稿の後、高崎直道博士が既に、安慧のこの個所の註釈が、BBh からの抜き書きに他ならないことを注意されているのを知った。「種姓に安住する菩薩」(『中村元博士還暦記念論集・インド思想と佛教』)、p. 210.